



レポート

関西学院高等部2年 牛場 裕介

「牛場、このプログラム申し込んでみようぜ！」

友人からのこの言葉が全ての始まりだった。2015年の年末、教室に貼り出された一枚の要項。そこには3万円でアメリカへ行けるという趣旨のことが書かれていた。しかし、そこにはこうも書かれていた。

「3名のうち2名は市立高校からの人選」

僕の学校は私立であるため、僕と友人のどちらかが行けるか、どちらとも行けないという2つの可能性が存在したのだが、2人とも面接を受ける前から受かるわけがないだろうという気持ちでいた。

そうこうしているうちに面接の結果が来た。愕然とした。

-牛場 裕介くんを派遣生とします 目の前が真っ白になった。家に外国人が来る。6週間も受け入れなきゃならない。何の心構えもしていない。どうしようという焦り、不安…

本当にいろいろな人に迷惑をかけてしまった。特に、母には心の底から感謝している。母の尽力がなければこの半年はなかっただろう。また、声をかけてくれた友人にも感謝をしている（彼はこのプログラムには落ちてしまったが、今3ヶ月カナダへ留学をしている）。

ついに関空に彼が到着した。名はTodd。だが、彼だけ著しく元気がない。何にも喋らない。家に着いたら、ごめん寝る、と言って寝てしまった。これが彼との生活の始まりだった。次の日起きて来ると少し元気が戻ったらしく多めの朝食を完食していた。最初のうちは全くコミュニケーションできなかったがだんだんと心が打ち解けて来て喋れるようになった。週末には父とToddと僕とで旅行に出かけることが多かった。京都、奈良、大阪へ行った。彼は神社がなかなか気に入ったらしく楽しんでた。また、僕の友達もつれて遊びに行ったこ

ともあった。彼らにも感謝だ。そして、多分一番 Todd のテンションが上がっていた時は姉妹都市協会主催のパーティーの時だろう。特にそうめん流しの時はものすごいスピードでそうめんを食べていた。だが、最後の週末 7 月 23 日だったと思うが事件は起きた。Todd が熱を出したのだ。急に頭がいたいと言ったので熱を測ってみると 38 度越えの高熱を出していた。そこで病院行こう、と彼に言うのと絶対行きたくない、と言うので薬持ってる？と聞くと他の留学生からもらう、と。いやどうやってもらいに行くねん。そこでもう一回彼に提案した。病院行って薬もらってこよう、だがまた彼は病院には行かないと言ったのでこう言った。「病院行かないのなら残りの日ずっと家の中で過ごすことになるで」（もちろん英語で） そうすると彼は折れたらしく病院に行くと言ってくれた。一体何が彼の病院に行く気持ちを止めていたのか。後から訳を聞くと、病院が怖かったのではなく、金すなわち診療代が高くなることを恐れていたらしい。調べてみると、アメリカでは一回の診療は保険なしだと数百万もするとのことだった。確かに、そのことしか知らない彼は嫌がる訳だ。だが日本は違う。彼もびっくりしていたが、保険なしでも 4000 円ちょっとで済んだのだ。そうして彼は一日寝るとすっかり元気になった。そうして残りの日々を全うした彼は 7 月 29 日アメリカへ帰っていった。

その後、僕の中に Todd ロスが起きたがもう 2 ヶ月後には自分がアメリカに行くんや、と意識し始めることでそのロスは消えた。だが、その前に学校の研修旅行でカンボジアに行くことになっていたのでアメリカに行くという心構えは消えていた。

さて、9 月 24 日僕たちはアメリカへ向け出発した。前日まで用意が追いつかずとてもギリギリだった。去年の夏にオーストラリアでホームステイしている僕は謎の自信を持っていたのだが、あと 10 分でスポーケンに着くという頃には緊張半分、ワクワク感半分の気持ちでいた。そして、スポーケン国際空港に到着。そこには懐かしい顔があった。Todd をはじめとするホストファミリーが温かく迎えてくれた。そこから 6 週間。ホントに数えきれないくらいの経験をさせてもらった。何回か車で長時間の旅行をしたこともあった。特に 5 時間ほどかけて行ったシアトル旅行は楽しいものだった。さて、そのたくさんの経験の中で印象に残っていることを挙げる。僕はフェリス高校に通い、そこで Choir という授業をとっていた。日本で言う「音楽」の授業なのだが、10 月の半ばに行われた定期演奏会のステージに乗ることができたのだ。3 週間余りで音を取り、英語で指示を聞いて改善し、自分にとってなかなかの挑戦であったが先生から「定期演奏会、乗りませんか？」と言われた時は、とてもうれしかった。無事本番でも歌うことができ、いい経験となった。その他、最終日近くにはコ

ンドン市長や教育長との会談もあった。

こうして無事に帰国し、今に至る。このレポートを書いている間もアメリカロスに浸りながら執筆している。

最後に、この留学を支えてくださった姉妹都市協会をはじめとする西宮市関係各位のみなさま、スポーケン側の姉妹都市協会ほかたくさんの方に感謝を述べたい。本当にありがとうございました。

